別記様式第４号

2022 年度 独創的研究助成費 実績報告書

２０２３年　３月　３１日

<table>
<tr><td>報　告　者</td><td>学科名</td><td>ビジュアルデザイン学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>風早　由佳</td></tr>
<tr><td>研 究 課 題</td><td colspan="6">米国の大学初年次アカデミック・ライティング教授法の調査とその応用研究</td></tr>
<tr><td rowspan="2">研 究 組 織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所 属 ・ 職</td><td>専 門 分 野</td><td>役　割　分　担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>風早由佳</td><td colspan="2">ビジュアルデザイン学科・准教授</td><td>英語教育、英米文学</td><td>調査、分析</td></tr>
<tr><td>研究実績の概要</td><td colspan="6">大学生や大学院生にとって、論理的な文章を書く力は、日々のレポートや試験、研究の集大成である卒業・修了研究において必ず必要となるだけでなく、社会人になってからも求められるスキルである。この「書く力」を養う目的で、初年次教育にライティングに関する科目を導入する大学も多い。文部科学省の「大学における教育内容等の改革状況について」(2017)では、661 大学（88.6%）が日本語表現力を高めるためのプログラムを導入していることが示されていた一方で、ライティング教育を初年次教育において独立した科目として導入している大学は、23.9%(西口 2018)と未だ低い水準である。
18 歳人口減少に伴い大学進学希望者を入学定員総数が上回る「大学全入」時代到来が、2023 年、もしくは 2024 年とも言われているが、今後「書く力」の涵養は大学教育においてさらに重要度を増すと考えられる。諸外国の事例に学び、その教授法を日本独自のスタイルに取り込んだ教授法の開発は急務と言える。特に、大学の大衆化と、それに伴う学生の質的低下問題を早期に経験し、対応してきた歴史を持つアメリカのアカデミック・ライティング教授法モデルは、日本の大学・大学院における教育実践においても示唆を与えるものである。
本研究では、米国のアカデミック・ライティング教授法を調査し、ビジュアルデザイン学科必修科目「アカデミック・ライティング」等において実践を試みた。

研究成果
１．米国の事例調査と教材作成（４月～８月）
アカデミック・ライティングが必修科目として定着している米国の事例を中心に、次の内容について調査した：シラバス、授業資料を収集し、課題テーマの設定、文字数、協働作業の導入方法、ステップアップ方法

２．ライティングにおける内容と形式の関連調査（８月～９月）
ライティングの基本型について先行研究及び論文にあたり、内容と形式の繋がりにおける傾向を調査する。特に、Introduction（導入）Body（内容部分）Conclusion（結論）という大きな構成の中でも、Main Idea（主張）、Explanation（説明）、Evidence/Example（証拠/例）、Comment/Opinion（自分の意見）の配置、それぞれの構成、分量について調査した。</td></tr>
</table>

※ 次ページに続く

研究実績 の概要	３．授業実践（９月～２月） 　対象科目：学部「アカデミック・ライティング」、大学院「論文作法Ⅰ」の指導前後にライティング課題を課し、文構造の特徴、文章表現の変化を分析した。各授業用に作成したワークシート及び、ピアレビューシートを導入してデータを得た。 　また、ライティング評価表（ルーブリック）の教員用／学生用を作成し、課題提出ごとに評価を行った。ピアレビューシートの活用（複数の書き直しを行った学生）は、最終課題論文の評価が高い傾向にあった一方で、プレゼンテーションの評価とライティングの評価には特徴的な相関は見られなかった。 　次年度以降、今年度試行したルーブリックを修正し、さらに精度を高めて導入する。
成果資料目録	・本研究でのライティングにおけるピアレビューのデータを活用して令和５年度科研費・基盤研究（C）に応募し、採択。